茨城県行方郡麻生町

大麻古墳群（5号墳）

調査報告書

1999年9月

麻生町遺跡調査会

序

麻生町遺跡調査会長
（麻生町教育長）　橋　本　豊　榮

豊かな自然に恵まれた麻生町。霞ケ浦と北浦のふたつの大きな湖に面し、水と緑の宝庫であり、古代より人々が生活するうえで恵まれた環境であった本町には、幾多の歴史が刻まれた埋蔵文化財をはじめとする貴重な文化財がたくさん残されています。そして近年、文化財に対する関心とともに保護・保存、その活用への意識の高まりは格別のものがあります。

麻生の土砂採取場計画地内は、周知の埋蔵文化財・大麻古墳群の範囲で、幾度も発掘調査が行なわれてきて残された古墳です。事業者と協議して記録に残すことにしました。その結果、古墳は認められず、墓地とした区域から一部骨粉、和釘の出土をみるにとどまりました。埋蔵文化財の保護に理解を示した関係各位には、深甚の敬意をささげる次第です。

末筆ではありますが、調査主任として現場調査から報告書執筆に至るまで御尽力を賜りました鹿行文化研究所 汀 安衛 氏、そして経費負担に理解くださいました 有限会社 幸新取材、また、発掘調査に従事してくださった作業員の皆様に心から敬意を表し、感謝申し上げます。

平成 11 年 9 月

凡　　例

1　本報告書は、茨城県行方郡麻生町麻生1862－2番地他に所在する大麻古墳群5号墳と『宗見台墓地』の土砂採取に伴う記録保存の発掘調査報告書である。

1　本古墳は『前方後円墳』として分布調査で報告されている。

1　本古墳及び宗見台墓地の調査は平成11年5月10日から5月19日迄の間8日間で、整理は6月20日に終了した。

1　本古墳及び宗見台墓地の調査は、麻生町遺跡調査会を組織し鹿行文化研究所の汀安衛が担当した。

1　整理は、図面・トレースを前田京子、遺物の実測を戸島和子、挿図・図版・原稿は汀が行なった。

1　本報告書の縮尺は原則として遺構は1／30、遺物は1／3を基準とし、水糸レベルは図中に表示した。

1　本調査に際し次の方々に協力を受けた。記して感謝を表したい。

茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、麻生町教育委員会、（有）幸新取材・金山貢大・永作栄吉、箕輪リース、横田泰隆、前田京子、戸島和子、清宮久、根本武雄、福沢恵子、菅谷益尚。

1　本調査の組織は次表のとおりである。

役　職	氏　名	所　属
会　長	橋本豊榮	麻生町教育委員会教育長
副会長	辺田弘	麻生町文化財保護審議会会長
理　事	羽生幸三	麻生町文化財保護審議会委員（麻生地区）
〃	羽生均	麻生町文化財保護審議会委員（麻生地区）
〃	平輪一郎	麻生町文化財保護審議会専門調査員
〃	植田緻雄	麻生町文化財保護審議会専門調査員
〃	汀安衛	調査主任　鹿行文化研究所
〃	金山貢大	（有）幸新取材　代表取締役
〃	高木俊博	麻生町教育委員会生涯学習課長
監　事	永作栄吉	（有）幸新取材
〃	小室旭	麻生町出納室長
幹　事	額賀修一	麻生町教育委員会社会教育係長
〃	田口正人	麻生町教育委員会主事補

目　　次

序　文

凡　例

目　次 …… 1

挿図目次 …… 2

図版目次 …… 2

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 3

Ⅱ　調査に至る経過と日誌 …… 4

1　調査に至る経過 …… 4

2　調査日誌 …… 5

Ⅲ　調査の概要 …… 5

1　古　墳 …… 6

2　土　坑 …… 7

3　溝 …… 17

Ⅳ　総　括 …… 18

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡の位置と環境 …… 3

第 2 図　遺構全測図 …… 4

第 3 図　5号墳土層と平面図〔地山層〕 …… 6

第 4 図　1・2・3・4・5・6号土坑平面図・出土遺物実測図 …… 8

第 5 図　7・8・9号土坑平面図・出土遺物実測図 …… 11

第 6 図　10・11・12・13・16号土坑平面図・出土遺物実測図 …… 13

第 7 図　17・18号土坑平面図・出土遺物実測図 …… 15

第 8 図　19・20・21・22号土坑、ピット、2号溝平面図・出土遺物実測図 …… 16

第 9 図　1号溝平面図・出土遺物実測図 …… 17

図　版　目　次

ＰＬ－ 1　遺跡からの麻生の街並と『5号墳』調査前と土層

ＰＬ－ 2　調査後全景、ＳＫ－4・3・9・6・8・11号完掘と土層

ＰＬ－ 3　ＳＫ－12・13・16・17・21号完掘と骨

ＰＬ－ 4　ＳＤ－1・2・出土遺物、調査風景

Ⅰ　遺跡の位置と環境

本古墳は、茨城県行方郡麻生町麻生１８６２－２他に所在する。古墳の所在する台地は、麻生警察署付近をくびれ部とし樹枝状に開析谷が発達、半島状に台地が伸びる。遺跡は、標高30～32ｍ程の台地で麻生町役場の北１㎞、麻生高校の西側に位置する。遺跡からは常陸蘇州水郷地帯を眼下に望み、香取神宮の森、佐原の街、下総の台地を一望し西側からは三っ又沖から土浦入り、筑波の山並み、遠く日光連山を遠望する景勝の地である。遺跡周辺は城下川により開析された沖積平野が開け、豊かな水田地帯として利用されている。

本『古墳』はこのような自然環境に恵まれた台地に位置し西側には『小屋ノ内館』、東側には『二本木城』が所在したが土砂採取のため記録保存されている。その他周辺には、大麻貝塚、四部切遺跡、麻生陣屋跡、羽黒山『要害』、小屋下『要害』が散在し本『古墳』周辺は、多くの遺跡が所在している。また、本『古墳』の周囲は以前調査され２基の墓が検出され墓地として利用されていた。本墓群を古墳とする人も有り見解の相違が見られる。

（注１）、麻生町遺跡分布調査では古墳群とされている。

第１図　遺跡の位置と環境

Ⅱ　調査に至る経過と日誌

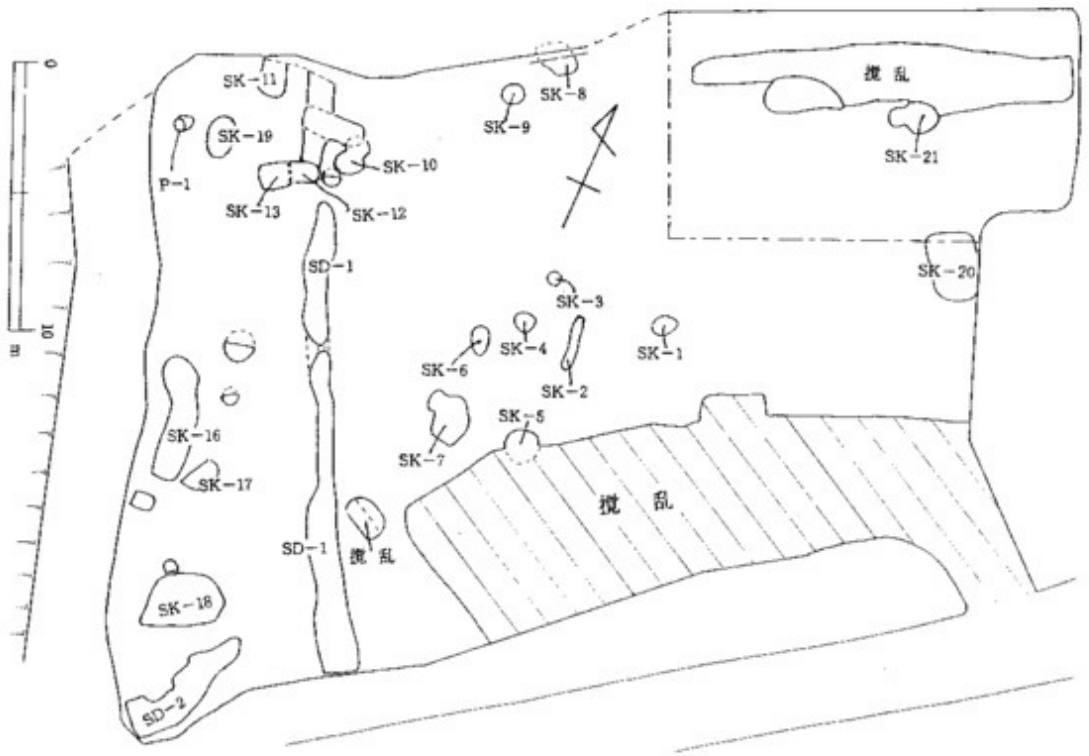
1. 調査に至る経過

平成11年４月21日に、有限会社 幸新取材 から麻生町麻生の土地を土砂採取する計画があると申し出があった。しかし、この土地は大麻古墳群の範囲で５号墳が所在していた。４月31日に鹿行文化研究所が遺構確認調査を行った。この確認調査をもとに有限会社幸新取材と協議して調査面積の確定と記録保存のための発掘調査をすることに合意した。発掘調査は５月10日に開始することとした。

2. 調査日誌

本『古墳群』は、前述のとおり土砂採取、宅地造成工事等により記録保存され昭和60年に煙滅した。しかし、５号墳と言われる『古墳』が存在するとの分布調査が報告され、鹿行教育事務所の現場踏査でも『古墳』が認定され、調査する事となった。また北側の台地は江戸時代の『墓地』として利用されてきた。無論、『古墳』部分も墓地であった。

このような事情の中での調査となった。以下、調査日誌を箇条書に報告する。



第２図　遺構全測図

平成11年

4月31日　宗見台墓地部分、一部表土除去、5号墳部分の草刈り清掃確認調査。

5月10日　宗見台墓地部分の表土除去、遺構確認作業開始。

5月11日　土坑の調査開始、すべて最初は1／2の調査とした。

5月12日　土坑土層、11・12・13・14・15の調査、13号から釘、12号は骨粉のみ散在して検出される。

5月13日　17・18号調査、1号溝調査、遺物、遺構は少ない。1号溝は墓地と境内の溝。5号墳の調査準備開始。

5月14日　土坑8・9・12・13・14・16・18・19号断面図作成。
5号墳は土手の名残り？。40cm前後からすべて堆積層。

5月17日　2号溝土層、断面図作成。12・13号土坑断面図。5号墳は地山のみであることが判明、一部盛土、土手状部分あり。21号土坑は時期、性格不明。土層作図。麻生町文化財審議委員　平輪一郎氏視察、懇談。

5月18日　宗見台墓地の境内部分の小屋の下の調査、シカ骨出土、2頭分　2ケ所の土坑あり。戦後の所産。

5月19日　本日で作業終了。残務整理確認、終了後簡単な打ち上げ　4:30分より。
以上が作業日誌の抜粋である。

Ⅲ　調　査　の　概　要

はじめに　（第2図）

本『古墳』は、すでに述べてきたが昭和60年に大麻古墳群として調査し『古墳』は存在しない。墓である事が明白であった。今回前方後円墳の存在が指摘され、前回の調査は否定された。未『麻生町遺跡分布調査報告書』では前方後円墳が存在、鹿行教育事務所の現場踏査でも同様な報告がなされている。したがって報告書、踏査報告の指示に依り『古墳』として調査をする事となった。

前回の調査結果は、無視されたに等しい扱いであり調査は、その結果行なわれる事となった。大麻『古墳』群は、すでに墓として報告されているのである。

調査は、遺存する山を削り断面図を作成し『古墳』の存在を確認することが主目的で、埋葬施設の存在等は、現場からは想定出来ない。したがって遺存する『古墳』の断面部分をカットし断面図を作成、封土が確認出来るかどうかが最大の焦点になった。

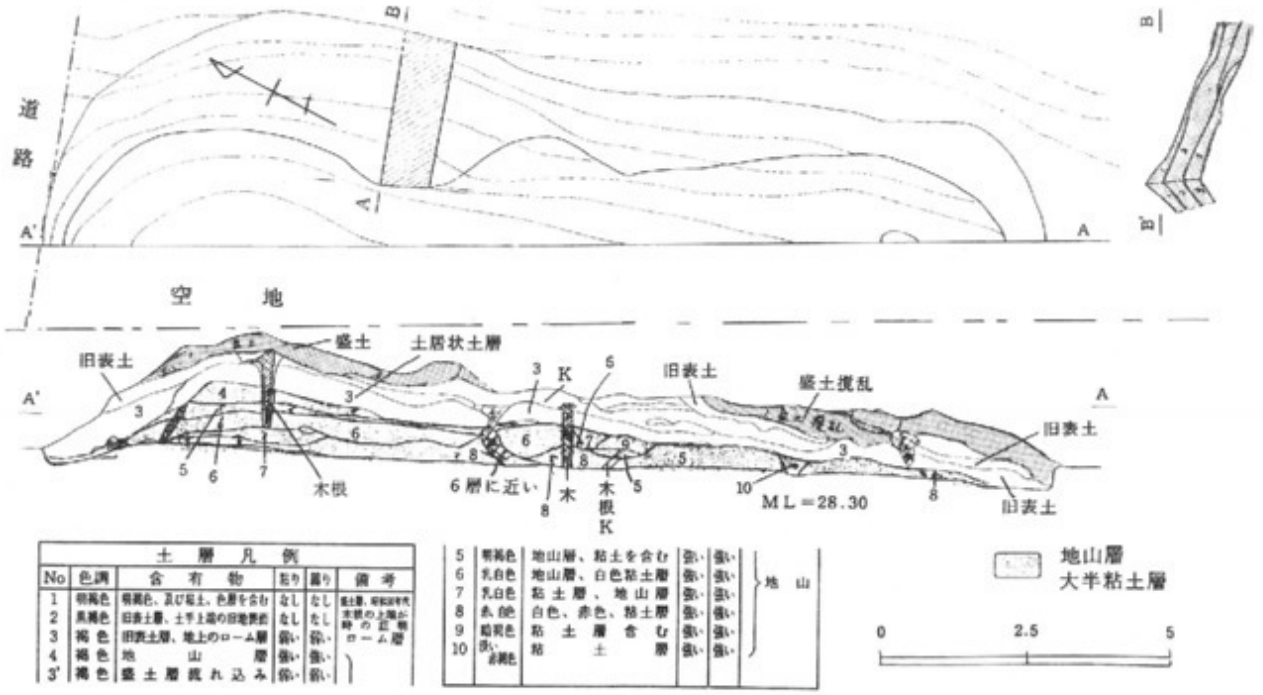
また隣接の宗見台墓地は縄文、古墳時代の遺構、墓地が存在する可能性があり調査区とした。以下『古墳』、宗見台墓地の順に述べていきたい。

1.「古　墳」　（第3図）

本『古墳』は、草刈り終了時点で可能性は皆無に近かった。平面図、土層断面図作成のため遺存部をカットしたところ、大部分が地山層であった。スクリントーンの部分は全て堆積層（4層以下は全て）で旧表土2層は一部土手の3層部分の上に存在し松の切り株が上端に観察される。3層は、土居と推察される一部で20～60㎝程の盛土が認められる。南側では撹乱が多く一部変則的である。その上に新たな盛土が北、南側に見られる。中央部には撹乱部が見られる。層序からは封土から『古墳』の存在は肯定出来ない。3層部分は、北側の宗見台墓地の土手の延長で、道路部分はかなり堆積層がある。造成工事と農道のためと考えられる。本農道は、古来からの道路で麻生から北浦方面への古道で大麻神社参道へ続き新原へと伸びる。よって、かなり以前から削平、補修がなされていたと推察される。

遺物は、皆無で一片の土器も認められなかった。土居の時期は特定出来ない。

以上の諸点から本地区には『古墳』は存在しない。『古墳』として登録されていた1・2号墳は（大麻古墳群、1・2号墳）で述べているとおり共に墓で1は崩落し仔細は不明。熟年男子でかなり大柄であった。遺骨とともにキセル、小刀、寛永通宝等の六紋銭が検出された。2号墳は、方形の塚でかなり盗掘を受け撹乱され常滑焼きの水瓶は割られていた。中には、幼年期の男子の骨が、炭化材と共に埋葬されていた。本水瓶の中には文久通宝が六紋銭として副葬されていた。盛り土をもつ墓で本地区には『古墳』の存在は確認出来なかった。5号墳部分は、土居が50㎝程



土層凡例					
No	色調	含有物	粘り	暴り	備考
1	明褐色	明褐色、及び粘土、色層を含む	なし	なし	盛土層、昭和初期代古墳の上端が時の正確
2	黒褐色	旧表土層、土手上端の旧地表部	なし	なし	
3	褐色	旧表土層、地上のローム層	弱い	弱い	ローム層
4	褐色	地山層	強い	強い	
3'	褐色	盛土層撹れ込み	弱い	弱い	

5	明褐色	地山層、粘土を含む	強い	強い	地山
6	乳白色	地山層、白色粘土層	強い	強い	
7	乳白色	粘土層、地山層	強い	強い	
8	赤色	白色、赤色、粘土層	強い	強い	
9	暗褐色	粘土層含む	強い	強い	
10	赤褐色	粘土層	強い	強い	

第3図　「5号墳」土層と平面図〔地山層〕

の高さで築かれていた。依って本地区には昭和60年代には『古墳』の存在は確認出来なかった。これが大麻１・２号墳を調査した結論であった。奇しくも本土居を『古墳』として調査することになった事は前述の【仏】の導きか、盗掘人への復讐か、縁のある事実である。それも墓地の囲いとは。

2. 土　坑

前述の『古墳』北側は墓地として利用されていたと推察され『小屋の内館、大麻古墳群調査報告書』『分布調査報告書』を確認したところ、石塔が出土していて『宗見台墓』として登録、よって本地区は『宗見台墓地』として報告したい。

本地区は、全測図でもわかるように東－西方向に浅い溝が南側に位置し、墓地と境内？の境である。耕作者の談話では、以前はこの部分に小さな土手があり西、北側に一部現在でも残っている。との談話がありこれを完全に裏付けている。西側では４人分の人骨が出土している。以下、『墓地』『境内』と分け報告したい。

１号土坑　　（第４図）

本遺構は、境内地区の中央部に検出された遺構で径70㎝程の楕円形状の遺構で掘り込みは40㎝と浅く中央部がさも深く弱い（U）字状掘り込みで、底部中央に小ピットが見られる。底部の締りはあまり良くない。

覆土は、２層で明褐色、褐色層でロームブロック、粒の混入の差であり粘性、締りはややある。層序は、流れこみに依る自然埋積である。

遺物は、皆無で時期を決定する資料はない。従って時期は不明である。

２号土坑　　（第４図）

本遺構は、溝状に長く南北2.35 ｍ、幅30～45㎝で、掘り込みは10㎝前後と浅い。南側に木の根状の掘り込みがある。底部は、ローム剥出し状締りはややある。

覆土は、２層で色調は褐色、明褐色、ローム粒子の混入の差。粘性、締りは強い。

遺物は、皆無で時期を確定するものはない。本遺構も境内地区に位置する。

３号土坑　　（第４図）

本遺構は、境内地区の中央に位置し検出された。径55㎝、掘り込みは10㎝と皿状形態。底部の締りはややある。

覆土は、２層でローム粒子の混入の差。粘性、締りは１は弱く２層は強い。自然埋積。

遺物は、皆無で時期、性格を決定する資料はない。

SK－1

土層凡例				
No	色調	含有物	粘り	締り
1	明褐色	ローム粒、ブロック多量	やや有り	やや有り
2	褐色	ローム粒、粒子少量	〃	〃

SK－2

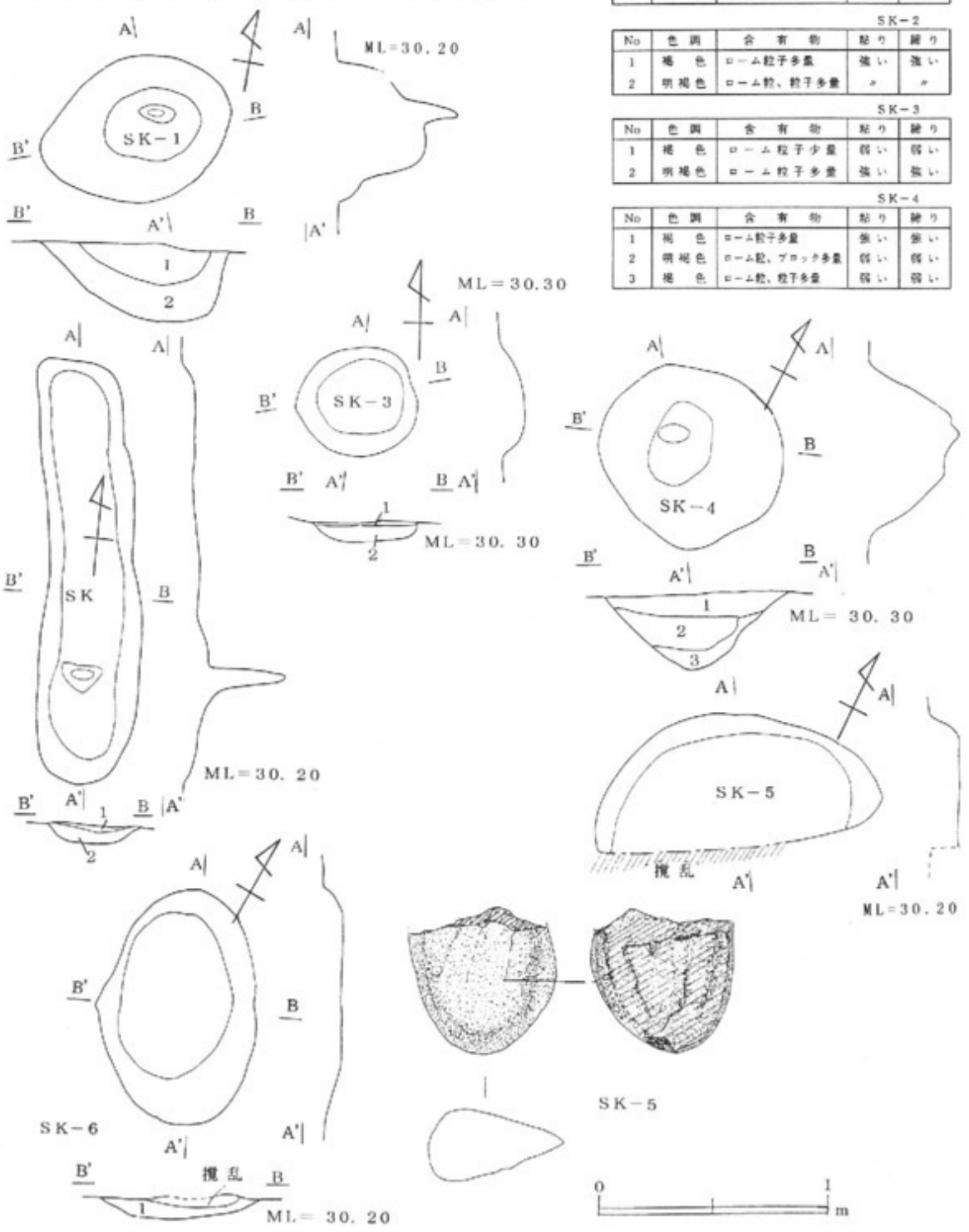
No	色調	含有物	粘り	締り
1	褐色	ローム粒子多量	強い	強い
2	明褐色	ローム粒、粒子多量	〃	〃

SK－3

No	色調	含有物	粘り	締り
1	褐色	ローム粒子少量	弱い	弱い
2	明褐色	ローム粒子多量	強い	強い

SK－4

No	色調	含有物	粘り	締り
1	褐色	ローム粒子多量	強い	強い
2	明褐色	ローム粒、ブロック多量	弱い	弱い
3	褐色	ローム粒、粒子多量	弱い	弱い



第4図　1・2・3・4・5・6号土坑平面図・出土遺物実測図

4号土坑　（第4図）

本遺構は、境内地区の中央部に位置し検出された。径85cmで弱い（V）字状形態で中央部が35cmとさも深い。底部は僅かに掘り込むピット状遺構がある。締りはややある。

覆土は、3層で明褐色、褐色等でホーム粒子、ブロック、粒の混入の差、締りは、粘性はいずれも弱い。層序から自然埋積？。

遺物は、皆無で時期を決定するものは無い。

5号土坑　（第4図）

本遺構は、境内地区のやや西寄りに位置して検出された。約1／2を欠失しているが径約1.2m程の円形プランを呈すると推察される。掘り込みは15cmと浅く南側は撹乱されている。底部の締りはややある。

覆土は、1層褐色で締り、粘性はややある。層序から人口的埋積。

遺物は、石器が1点出土している。粗製の打製石斧でかなり使用したと考えられ磨耗が進んでいる。

石器のみで時期を特定するのは危険であるが縄文時代の土坑の可能性がある。

6号土坑　（第4図）

本遺構は、調査区西寄りに位置し検出された。長円形プランで南北1.15m、東西70cm程である。掘り込みは10cmと浅く、皿状の断面。

覆土の上端は、撹乱層で下部は褐色層でローム粒子多量で粘性、締りは強い。自然埋積。

遺物は皆無で、時期は不明。境内地区に位置する。

7号土坑　（第5図）

本遺構は、境内地区の西寄りに位置し検出された。東西1.2m、南北1.9m程の不整形プランの遺構で掘り込みは80cmと深い。底部は東西共弱い（V）字状でローム剥出し状で締りはややある。

覆土は、5層で黒色、黒褐色、褐色、明褐色等で1層は、黒色粒子を多量に含み、2層もやや多量。3層からはローム粒、ブロックの混入の差、4・5層を除き粘性、締りは強い。層序から投げ込み的感じである。

遺物は、石器が中央部5層から出土している。その他縄文土器細片が7片出土している。時期の判別は不可能な小片。その他2の石器が3層から出土している。

8号土坑　（第5図）

本遺構は、境内地区北側の土居にそって検出された。農作業の掘り込みの可能性もある。深さ20cm程で径60cm程の円形状プランか。底部は、やや凹凸気味で締りはややある。

覆土は、1層暗褐色で粘性、締りは弱く人為的埋積の可能性が強い。

遺物は皆無で、時期は近世以降の可能性が高い。

9号土坑　（第5図）

本遺構は、境内地区北側に位置し検出された。東西70cm、南北90cmの楕円形状プランでほり込みは40cm程を測る。掘り込みは弱い（U）字状形態。底部の締りはややある。

覆土は、2層で灰黒褐色で灰褐色の粘土を多量に含み粘性、締りは強い。2層も小量粘土が混入する。建屋の基礎状ある。

遺物は、皆無で時期・性格を特定するものは無い。本遺跡では特異な遺構である。

10号土坑　（第6図）

本遺構は、境内地区の西側に位置し検出された。墓地入り口部分？。東西95cm、南北85cmの楕円形状プランを呈し、底部は、中央部がやや高く不安定、凹凸がある。東側は撹乱が入る。

覆土は、2層暗褐色、褐色でローム粒、ブロックを含む。流れこみ的層序で自然埋積が推察される。粘性、締りは弱い。

遺物は、皆無で時期、性格を特定するものは無い。

11号土坑　（第6図）

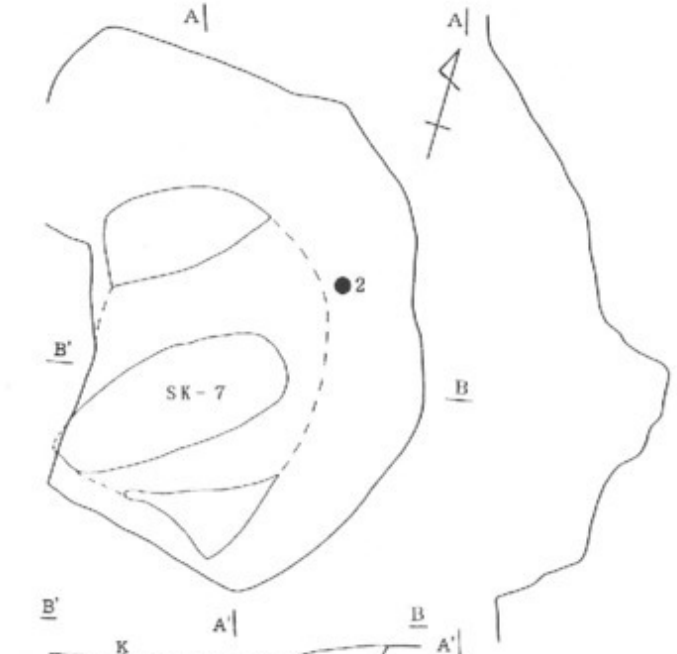
本遺構は、墓地地区の北隅に位置し検出された。南北1.25cm、東西90cmの長方形プランで長軸を南北に置く。掘り込みは27cm前後、壁面は鋭角的で、底部の締りは良い。西側に浅い掘り込みが見られる。

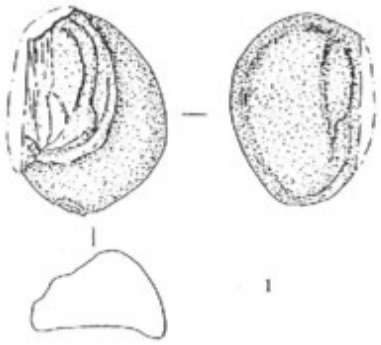
覆土は、2層で黒褐色、明褐色で土坑部分は1層で投げ込み的で粘性、締りは弱い。遺骨を改葬した可能性がある。

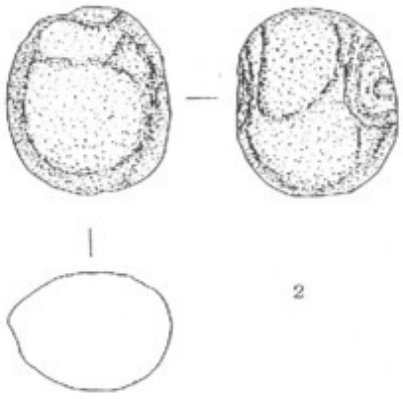
遺物は皆無で時期、性格は不明。掘り込み的には『墓』の可能性が高い。

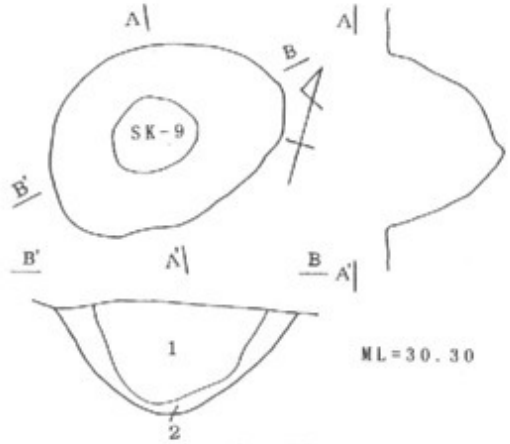
12号土坑　（第6図）

本遺構は、墓地地区の端、土居状部分から検出された。規模は東西95cm、南北82cmで掘り込みは25cmと浅い。下層部分から骨扮状が部分的に検出された。本覆土は全て篩いをとうしが、特別な遺物は検出されなかった。









SK−7

土層凡例				
No	色調	含有物	粘り	締り
1	黒色	黒色粒多量	強い	強い
2	黒褐色	黒色粒、ローム粒多量	〃	〃
3	褐色	ローム粒、小ブロック多量	〃	〃
4	明褐色	ローム粒、ブロック多量	弱い	弱い
5	明褐色	ローム粒子多量	〃	〃

SK−9

土層凡例				
No	色調	含有物	粘り	締り
1	黒褐色	粘土層?、版築状、土台?	強い	強い
2	明褐色	ローム多量	〃	〃

第5図　7・8・9号土坑平面図・出土遺物実測図

覆土は、暗褐色１層で撹乱状土層。粘性、締りは弱い。

遺物は、皆無で時期を特定するものは無い。骨粉状の散在から『墓』の改葬の跡と推察される。13号土坑と僅かに切り合い関係にある。

13号土坑　（第６図）

本遺構は、墓地地区の端、12号土坑と複合関係にありこれを一部掘り込む。東西1.1ｍ、南北70cmの長方形プランで、掘り込みは50cmとやや深い。底部は、一部凹凸が見られるが締りはある。中央付近の南側から15cm程浮いて、横位の状態で釘が出土している。和釘で頭がひしぎ薄く手製の造りである。長さ15cm。断面長方形の角釘である。

覆土は、撹乱され褐色層のみで粘性、締りは弱い。改葬が推察される。

14号、15号土坑は欠番。

16号土坑　（第６図）

本遺構は、墓地地区に位置し検出された。複合関係は無く、浅く溝状プランで弱く屈曲する。長さ4.6ｍ、幅は１ｍ前後のを計測する。掘り込みは、南側で15cmとやや深い他は落ち込みで、底部は凹凸が激しい。締りは悪い。

覆土は、２層で黒褐色、明褐色層で粘性、締りはややある。

遺物は、北側と中央部付近から小型の瓶が破砕された状態で出土した。推定復元で高さ20cm程のもので最大径を胴部中位に置く。その他２の石器破片、３の口縁部が出土している。

遺物から、本遺構の時期は古墳時代が推察される。西側の調査済の方形『墳』との関連した祭祀的遺構か。

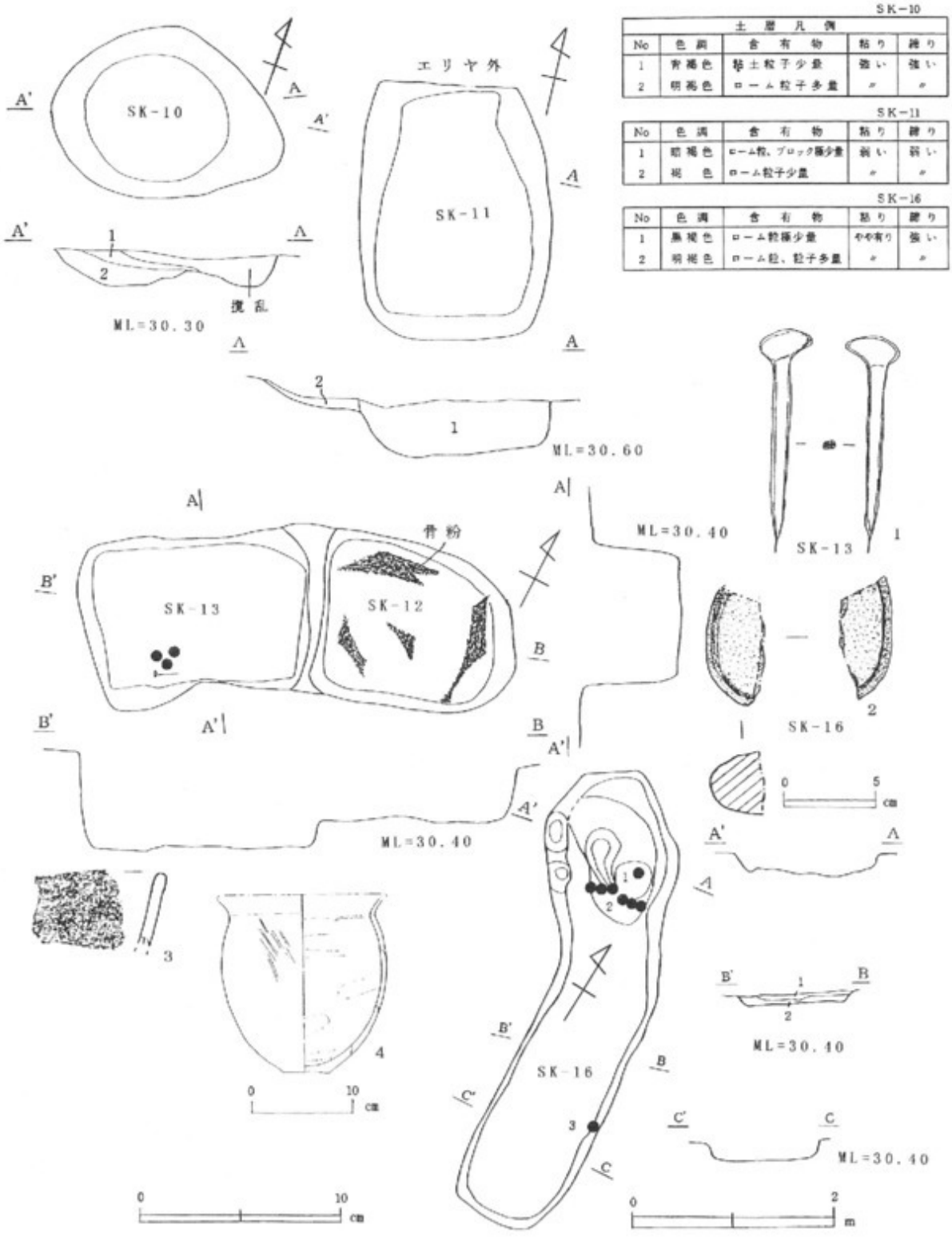
17号土坑　（第７図）

本遺構は、墓地地区に位置し検出された。16号の南側に位置する。長円形状で長径1.5ｍ、短径80cmで掘り込みは30cm、底部は、凹凸があり締りは悪い。

覆土は、２層で暗褐色、褐色で粘性は弱く、締りはややある。

遺物は、弥生式土器の胴部で附加条の縄が見られる。２は、縄文土器細片で胎土に繊維を含む。

遺物、遺構から時期、性格は特定出来ない。



第6図　10・11・12・13・16号土坑平面図出土遺物実測図

18号土坑　（第7図）

本遺構は、墓地地区に位置し西南の端から検出された。東西３ｍ、南北２ｍ程の方形状プランを呈している。中央部に鍋底状掘り込みが見られる。底部は、やや平坦に移行し、締り、粘性はややある。掘り込みは15cm前後で浅く、ピット状部分で90cmを測る。

覆土は、２層で黒褐色、褐色、投げ込み的層序を示す。粘性、締りは弱い。

遺物は、縄文土器の口縁部１、高台付の坏２、扁平な石器３が出土している。

遺構の時期、性格は不明であるが、２の高台付坏の時期以降が推察される。

19号土坑　（第8図）

本遺構は、境内地区の北西隅から検出された。径1.5ｍの楕円形状プランを呈する。掘り込みは30cmとやや深い。底部は、ほぼ平坦締りは弱い。やや深い鍋底状形態。

覆土は、褐色層の１層で粘性、締りは弱い。

遺物は、皆無で時期、性格は把握出来ない。

20号土坑　（第8図）

本遺構は、境内地区の東端に位置し検出された。東西2.2ｍ、南北1.5ｍの方形プランで掘り込みで、深さは20cmと浅い。壁面はなだらかな傾斜を示す。

覆土は、暗褐色、褐色の２層で投げ込み的で締り、粘性は弱い。

遺物は、皆無で時期、性格は不明。

21号土坑　（第8図）

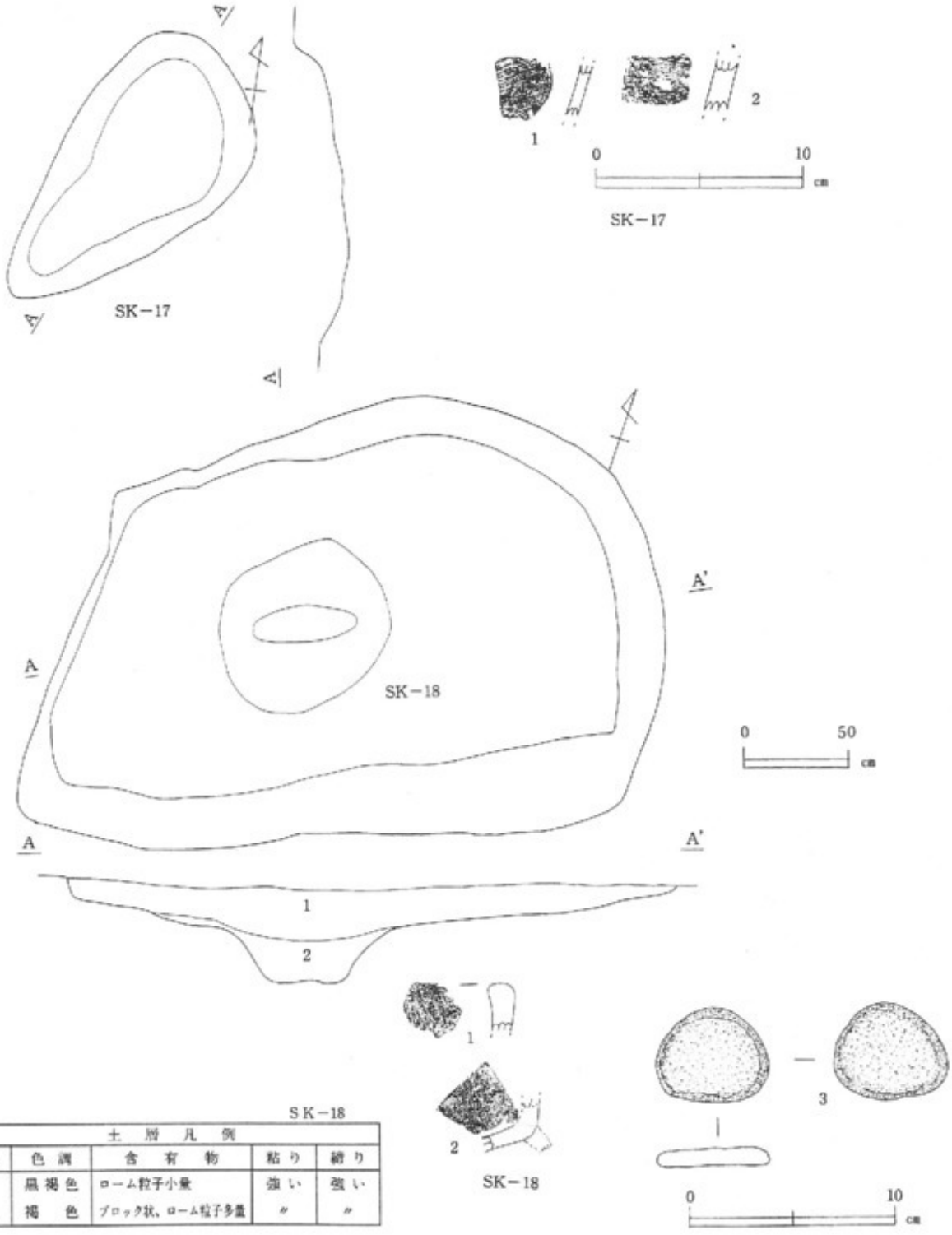
本遺構は、境内地区の北隅に位置し調査前は、作業小屋が建っていた。小屋を解体しその跡を調査したところ大半は撹乱であったが、一部イキ部分が見られそこに土坑が掘り込まれていた。径1.15ｍでほぼ円形、掘り込みは60cm程で底部は平坦でしまりはややある。底部近くにほぼ前面的に薄く、骨粉状の白色の層が見られ、21号土坑にきられる。

覆土は、暗褐色、褐色、灰白色の３層で粘性、締りは弱い、人為的な埋め込み層。

遺物は、前述の骨粉のみで動物の骨『山羊』と思考する。

22号土坑　（第8図）

本遺構は、境内地区位置し検出された。小型の土坑で、21号を僅かに掘り込む。深さは40cmと浅く、中央部には幼年の『山羊』の骨が各部に分けられて埋葬されていた。脚部、肋骨、頭蓋骨等がそれぞれにまとまって出土している。これらの状態からは食用の跡埋葬したと推察される。

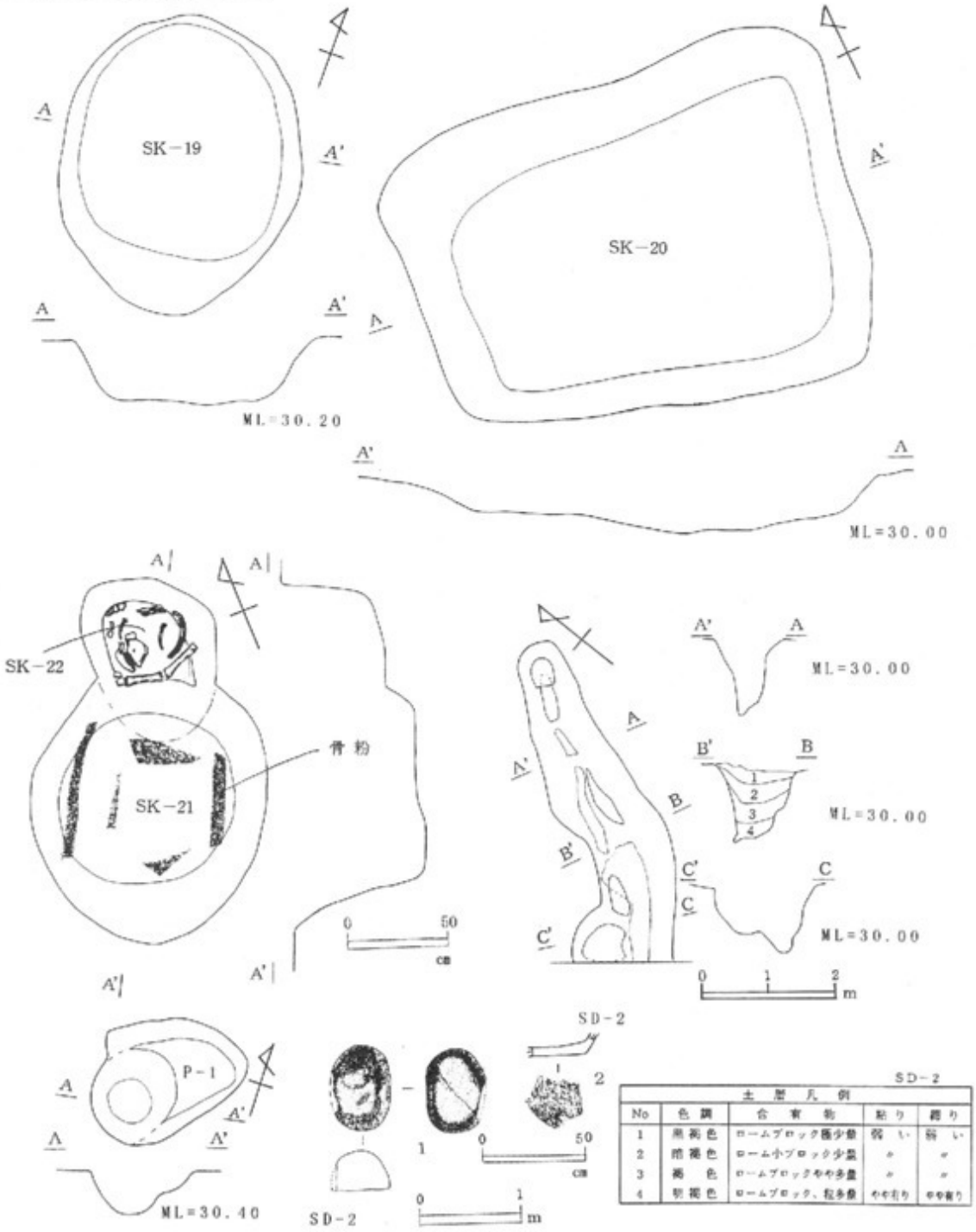


SK－18

土層凡例				
No	色調	含有物	粘り	締り
1	黒褐色	ローム粒子小量	強い	強い
2	褐色	ブロック状、ローム粒子多量	〃	〃

第7図　17・18号土坑平面図・出土遺物実測図

時期は、戦後昭和20年代以降が推察される。21号土坑とはやや時間差が存在すると理解する。かなりの異臭をもち検出された。



第８図　19・20・21・22号土坑、ピット－１、２号溝平面図・出土遺物実測図

3. 溝

本遺跡では境内と墓地との境部分に溝と土居を用いていた。この先端部の南東側が大麻『5号墳』であることが判明した。これは【昭和60年代の調査が間違いでは無く、存在したのは土居】『2号墳を盗掘した人間がなぜ、この古墳を盗掘しなかったか、疑問が残る。この時5号墳をも盗掘し『古墳』として確認した』噂を聞き前方後円墳とした、のか大きな疑問が残る。以上の様な訳で土手の下に1号溝、墓地地区に中世の（V）字状溝が検出された。以下1号溝、2号溝として報告する。

2号溝　　（第8図）

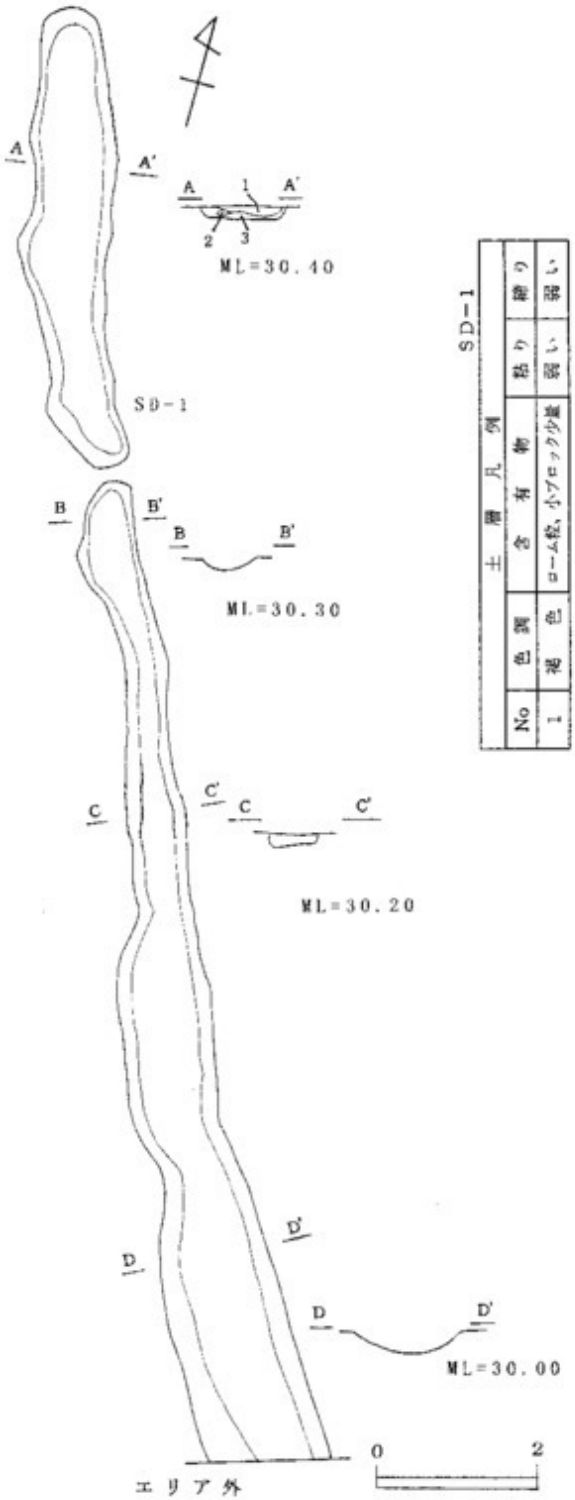
本遺構は、墓地地区に検出された遺構で長さ5ｍで幅1ｍ前後、掘り込みは1ｍと深く、隣接の（小屋ノ内館）溝と掘り方が一致する。時期的には小屋ノ内館と同時が推察される。遺物は、石器1とカワラケの底部2が出土している。

覆土は4層で、黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色でレンズ状の自然埋積の様相を呈する。粘性、締りは弱い。

本溝はあと1ｍは伸びるが、安全性から手前で調査を済ませた。

1号溝　　（第9図）

本溝は、前述のとおり墓地と境内の境部分に位置した遺構である。長さ16.5ｍで、幅は北側で狭くなり50cmから1.2ｍで、掘り込みは10cmから30cmであり境部分の溝の伝承は真実性があり、現に北西側にその残存部分が存在した。



第9図　1号溝平面図・出土遺物実測図

Ⅳ　結　語

本『古墳』の調査は、前回の『大麻古墳群調査報告書』を否定する事から始まった。最初は、鹿行教育事務所の現場踏査で『古墳』が存在する。との話から『麻生町遺跡分布調査報告書』の文中に前方後円墳の存在が報告されている事。二つの話、報告文から前述のとおり調査報告書は、否定より無視されたに等しかった。よって本『古墳』を調査する事になった。以下『古墳』と『宗見台墓地』及び境内地とし報告した。これを総括し結びに替えたい。落下した骨を拾い、六紋銭を篩にかけて調査した小生への『仏』の導きか。

本『古墳』は、前述のとおり土居が『古墳』に化けたものである。図版1に見られるとおり『古墳』らしく見えるが、同台地は北側が道路の為削平され遮断、本地区は2m程高くなり台地自体が大きな『古墳』状に見られる。（昭和60年当時）その時点で『墓』2基が存在した。1基は、径2m、高さ50cm、もう1基は一辺4～5m、高さ1m程の方形墓でかなりの盗掘を受け、水瓶を利用した骨壷は壊され撹乱されていた。すでにこの時点で『5号墳』は土居で『古墳』は存在しなかった。もし存在したと仮定した場合は本時点ですでに消滅していた。存在するのは約1m前後の土居が、北西から南東側に台地端に10m程伸びていた。［これが今回の調査で墓地の区画をなした土居と判明した］の見解の相違と思考する。見解の相違で土居が『古墳』と変化する。遺構の判断は慎重にと心に刻む事となった。

依って本『古墳』は、一部土居の残存部を認めるも遺存する大半は、台地そのものであった。大部分が、粘土層であり『古墳』の一部も検出出来なかった。出土遺物は、皆無で2層部分からスコップの一部が出土している。『撹乱層』

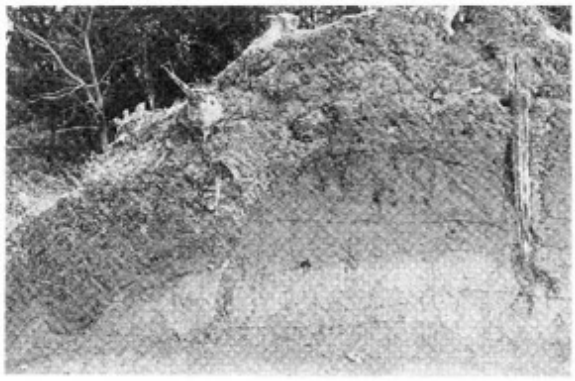
境内地とした部分では小土坑が見られた他、山羊の骨が出土したに過ぎず3割前後は赤土の採取で撹乱されていた。

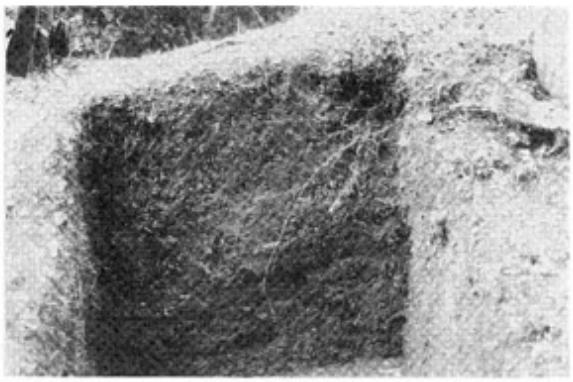
墓地とした地区では、墓として利用された土坑が検出されたが（12・13）改葬されたと推察され一部骨粉、和釘の出土を見るにとどまった。（西側では4人分の墓地が検出された。常滑の水瓶に埋葬された人も見られた。）本地区では墓地の境が検出されその延長線上に『5号墳』が存在した事が明確になり土居の存在も耕作者の談話で明白となった。

短い調査期間ではあったが、『古墳』『墓』が明確になった事は今日まで無縁仏として山野に埋もれた【仏】への供養になれば幸甚である。調査に御協力を得た大森さん、幸新取材の関係各位に記して感謝を表し結びに替えたい。　（了）

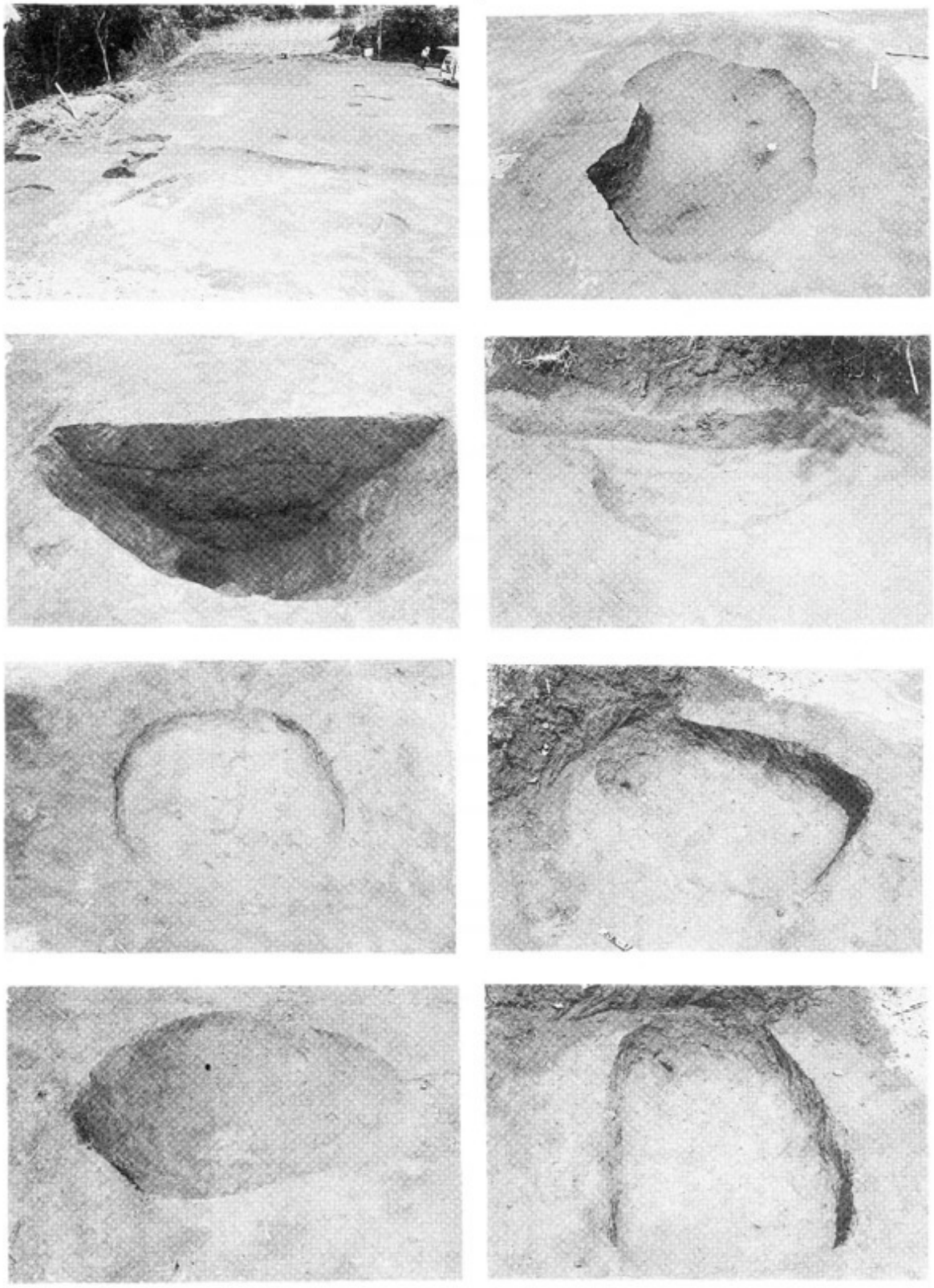
参考文献

大麻古墳群1・2号墳調査報告書　『墓』　昭和60年　汀　安衛　内野健造
小屋ノ内館・大麻古墳群（3・4号墳）調査報告書　1997年　汀　安衛
二本木城跡調査報告書　平成3年3月　二本木城跡調査会
麻生町遺跡分布調査報告書　麻生町教育委員会　茨城大学考古学研究室（未）

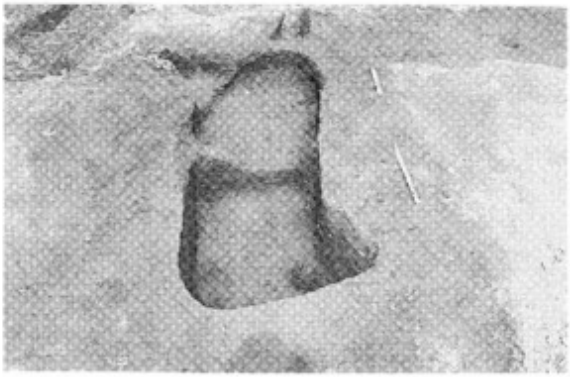
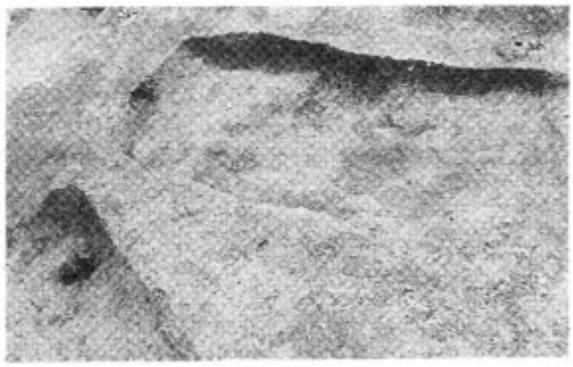


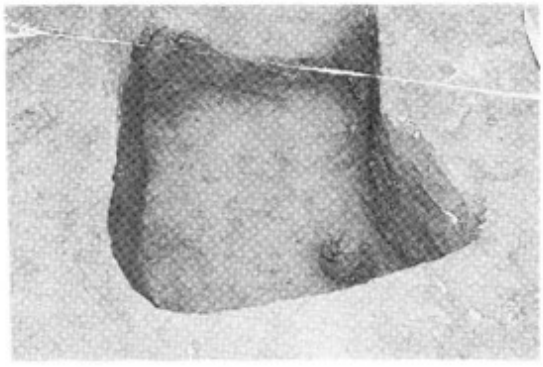


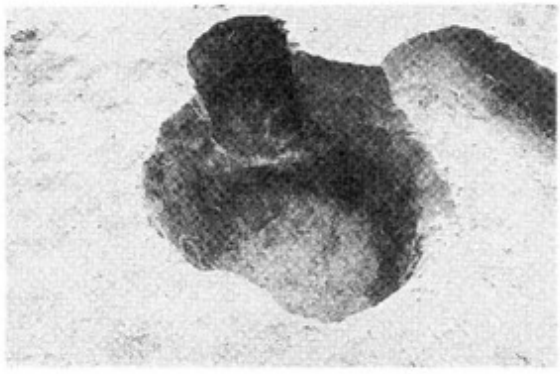
ＰＬ－１　遺跡からの麻生の街並、「５号墳」調査前、土層



ＰＬ－２　調査後全景ＳＫ－4.3.6.8.11号完掘と土層





ＰＬ－３　ＳＫ－12.13.16.17.21号完掘と骨

SK－5

SK－7

SK－13

SK－18

SK－16

SK－16

SK－17

SD－1

SD－2

撹乱部

ＰＬ－４　ＳＤ－1.2、ヤギ、作業風景、出土遺物

大麻古墳群（５号墳）

調 査 報 告 書

1999年９月

編集　鹿行文化研究所
　　汀　安 衛
　　鹿嶋市青塚690

発行　麻生町遺跡調査会
　　麻生町麻生1561－9

印刷　久保田印刷
　　麻生町四鹿963－20